

「水俣病」は「公害」であり、「イタイイタイ病」は「鉍害」である。

その意味で農薬汚染もまた「資本害」である。

「公害」という言葉がある。本

来の意味は、事業活動やその他多くの人の活動によって、不特定多数の人々の健康や生活に被害を与えることをいうのだが、あまり公害、公害といわれると、これはみんなの害、つまりみんながつくっている害で、国民みんなに責任があるといわれているようで、あまり良い言葉とはいえない。

外国にならって「環境汚染」と呼ぶのが適当と思われるが、その中の一つ農薬汚染は、農薬資本に大きな責任がある、つまり「資本害」であると、若月先生は次のように述べる。

新農薬の開発はめざましく、DD

T(1938年)、BHC(1942年)、パラチオン(1944年)など、相次いで強力な合成農薬が開発され、わが国に輸入された。そのすぐれた病虫害防除効果によって、わが国の農作物の増産に多大の貢献をしてきたことは確かである。またPCP、2・4-Dなどの除草剤の開発により、従来の手取り除草に比較して、除草作業を10分の1、20分の1に軽減し、農業者をこの重労働から解放したことも疑いない。

ところが、戦後このような農薬を「増産一途」のため、無制限に多く使うようになったわが国は、

ついに「世界における農薬の実験



まつしましゅうすい 松島松翠 (佐久総合病院名誉院長)

場」といわれるほどにいたったのである。1963年では、単位耕作面積あたり、ヨーロッパの6倍、アメリカの7倍という投入量で、だんぜん世界第一である。(中略) 高度経済成長を達成せしめるた



農薬を散布するヘリコプター

めには、国は生産力増強の名のもとに資本の自由気ままな活動を許し、これから起こる害を放置せざるをえなかった。その犠牲として一般国民の生活と健康がいちじるしく障害をうけるにいたった。もし今日、これを公害と呼ぶとするならば、「公害」こそはまさしく「資本害」と呼ぶべきものであろう。

「水俣病」は「公害」であり、「イタイイタイ病」は「鉍害」である。その意味で農薬汚染もまた「資本害」である。なぜならば、農薬を使わせることによって利潤を得るのは、農薬資本であることに違いないからである。(著作集第2巻、248頁、1986)。

農薬は、それを散布する農民自身の体をむしばむと同時に、環境汚染による一般国民の健康といのちまでもおびやかすまでになった。農薬資本との対決なしには、この問題を解決することは不可能であると、若月先生は述べている。